資料 4-3

令和６年 12 月　環境課

集落におけるネズミ防除の実施について

１．ネズミ被害への対処

（１）公有施設の管理（関係行政機関）

関係行政機関により、河川、道路、園地等その他として草刈等を継続して実施。

（２）集落一斉防除

①目的

○有人島のネズミ対策に関しては、遺産管理事業に伴う種間相互作用を踏まえつつ、遺産管理機関現地事務局及び関係行政機関の連携により、生体情報の収集、自主防衛の支援、国有地・公有地等における管理者責任によるネズミ防除・低密度化を進めることとしている。

○一方、現に生活環境等におけるネズミ生息密度の高さと感染症対策上の必要性が指摘されている状況に鑑み、より効果的な低密度方策を検討する必要がある。

○集落内でのネズミを一斉部防除することでネズミの低密度化を試み、村民の生活環境の保全、ひいては有人島のネズミ対策に寄与することを目的としている。

②実施時期　１回目：夏頃、２回目：冬頃

③実施体制

・村環境課：庁舎、村有地の一部での防除、その他防除業務委託、
　　村民等への周知（村民だより、掲示板）、
　　村民等へのカゴわなの貸与、捕獲ネズミの処理
・小笠原自然保護官事務所：遺産Ｃ、宿舎での防除
・総合事務所：総合事務所庁舎、宿舎での防除
・小笠原支庁：支庁庁舎、水産Ｃ、大神山公園での防除
・島しょ保健所：保健所、宿舎での防除
・父母農協、父母漁協、警察署、野生研、ＮＴＴ、気象庁、海保、海洋Ｃ：有志により防除

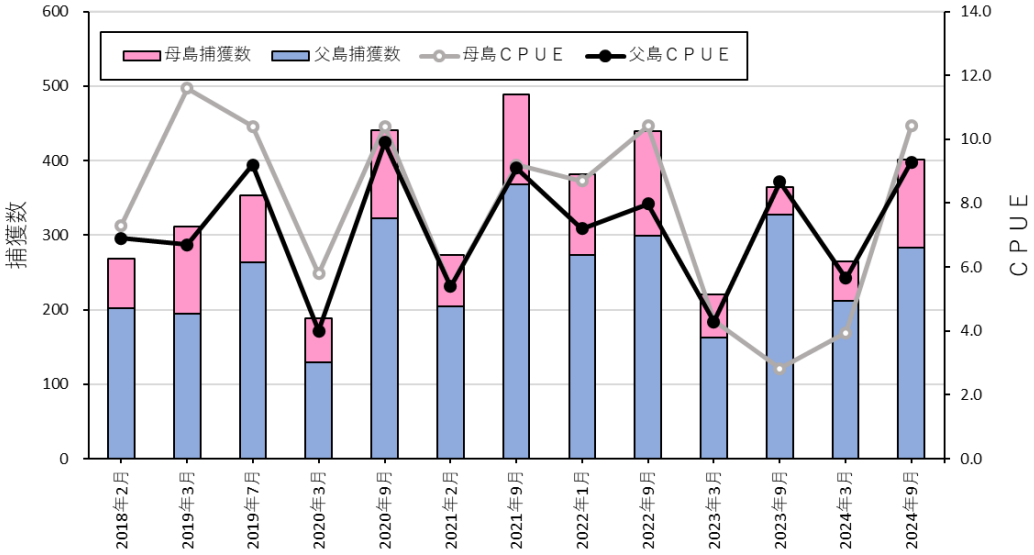
④カゴわなによる防除

【方法】　期間：５日間　実施者：委託事業、水セン、父漁協、海洋Ｃ

・初日の午後に各箇所 5～10m間隔でカゴわなを設置し、毎朝点検し、ネズミの捕獲が確認された場合は個体数をカウント
・期間最終日（５日目）にカゴわなを回収
・委託事業はカゴわなのみ。エサは魚肉ソーセージとゴマ油を使用
・捕獲個体については、基本的に防除実施者でそれぞれ処分（埋設、コンポスト化）
→困難な場合は、役場に持込みも可。（役場で冷凍処分後、コンポスト化）

【結果概要】

一回あたり父島と母島を合わせて 200～500 個体程度のネズミ類が捕獲されている。父島、母島ともに冬季に捕獲数及び捕獲率が低く、夏季に高い傾向がある。



わな設置数	959	984	955	1061	1095	1310	1333	1252	1279	1280	1279	1275	1045

図　父島、母島における捕獲数と捕獲率

⑤ベイトステーション（ＢＳ）による防除の試行

【方法】　期間：１２日間　実施者：カゴわな以外の実施者

・初日に各箇所 10～20ｍ間隔で殺鼠剤を充填したＢＳを設置し、周辺を毎朝点検し、ネズミの死体が確認された場合は個体数をカウント

・期間最終日（１２日目）にＢＳを回収（殺鼠剤の補充はしない）

・確認された死体については、カゴわなによる防除同様

【結果概要】

令和６年度に初めて試行した。前回の一斉防除で関係団体等の自前 281 基のカゴわなに代わり、106 基のＢＳに切り替えた。なお、カゴわなと違い、捕獲数を算出できないため、死体数をカウントしたが、実際の効果が定量的に測れないため防除前後の印象の違いを聞いた。

■母島（実施団体ごと）

・殺鼠剤は減っていたが無くなってはいない。防除前は例年よりも目撃数が多いとの声があり、道路での死体も見かけた。防除後は少なくなったような気がする（５基設置、回収１個体）。

・殺鼠剤は減らず。防除前後とも、よく道路等で見かける（５基設置、回収無し）。

・防除前は敷地外の道路でよく見かけた。防除後はあまり見かけなくなった（５基設置、回収無し）。

・防除前後とも特に変化無し（１基設置、回収無し）。

■父島の印象（実施団体ごと）

・１～３日目までは殺鼠剤減らず、４～５日目に減り始めた。10 日目に腐敗臭あり。最終日は殺鼠剤が減っており、ＢＳ内にネズミの糞あり（４基設置、回収２個体)。

・防除前はかなり目撃したが、被害は無い。防除後はＢＳ内にかなりネズミの跡があり、効果があったと思う（16 基設置、回収５個体)。

・コメント無し（３基設置、回収３個体)。

・防除前は目撃等特に無し。防除後は道路等に死体が増えたことから一定の効果があると思慮される（５基設置、回収４個体)。

・防除前は夜間よく見かけた。防除後は夕方でもＢＳ周辺で見かけた（９基設置、回収無し)。

・防除前後の印象は特に無し。カゴわなよりも手間が減ったが、ＢＳが虫の巣窟になっていた（３基設置、回収無し)。

・防除前は夜間、特に道路周辺で見かけた。防除後のＢＳは殺鼠剤が 50ｇ／基減っていたが、印象の差はない（３基設置、回収無し)。

・防除前は敷地の倉庫内での目撃率が高かった。防除後はその倉庫で目撃することが減ったように感じる（３基設置、回収４個体)。

・防除前は施設内での目撃頻度は低い。防除後も特別変化無し（10 基設置、回収１個体)。

・防除前は見かけることが多かった。防除後は見かけることが少なくなった気がする。餌が減っていたり、糞のあるＢＳもあり（３基設置、回収１個体)。

・防除前は花壇等の植物が度々食害を受けていた。防除後は大きな変化は感じられない。期間中の喫食量は少量で死体はいずれも仔ネズミで、親は駆除されていないと思われる。親を駆除するには１ヶ月など長期的に設置し、警戒心を解く必要があると考えられる（２基設置、３個体回収)。

・防除前は夜間によく道路を横切っているのを見かけた。効果が出るまで時間がかかる印象。殺鼠剤が 300ｇ以上減っているＢＳもあったので、効果は出ている気がする。姿は見ないが、音は聞こえる時がある。殺鼠剤の減り具合はＢＳによって異なった（７基設置、回収６個体、16 日間設置)。

２．今後のネズミ防除方法について

ネズミの集落一斉防除は平成 29 年度からこれまでに 14 回実施し、令和５年度まではカゴわな 1000 基程度の委託事業と協力いただける関係団体による自前の取組を組み合わせ、父島・母島に 1300 基前後のカゴわなを 5 日間設置するというものであった。ただし、毎日のカゴわなの点検と捕獲個体の回収、誘引餌の取り替えなど、作業量や個体の処理といった心理的負担も大きかった割にネズミの捕獲数は 300 個体前後／回であった。

そこで今年度から、自前の取組をカゴわなから殺鼠剤を入れたＢＳに試行的に切り替えることとした。ただし、不特定多数の人の出入りが多い施設、子どもが多くいる地区、殺鼠剤の影響がある可能性が高い生き物がいる施設については、そのリスクを鑑み、これまで通りのカゴわな設置となった。今後は地域住民に対して、殺鼠剤使用やネズミの死体増加について丁寧に説明しながら、ネズミの死体回収と組み合わせたＢＳによる防除への切り替えを図る必要がある。

参考１．集落ネズミ一斉防除の結果から得たネズミ類の生態情報（令和３年度まで）

集落ネズミ一斉防除で得られたデータを用いて、ネズミ類の生態について考察した。なお、捕獲個体の生殖器の観察記録と体重・体長の記録（(森, 1957）を基準とした)から成熟・未成熟の判別をした。

①父島

捕獲されたネズミ類は全てクマネズミで、性比はおおよそ 1:1 であった。夏季に捕獲数が多く、冬季に少ない顕著な季節変動を示した（図 1)。未成熟個体は夏季に多く、冬季は少ない。冬季の未成熟個体は平均気温が最も下がる 12－3 月に繁殖したと推察される（図 2)。以上の結果から、父島においてクマネズミは周年繁殖しており、気温の上昇する夏季に繁殖が盛んになると考えられる。

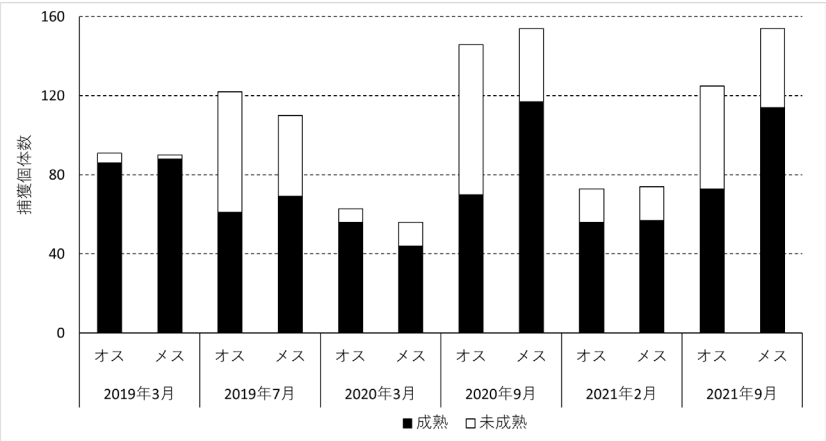


図　父島のクマネズミ捕獲数、性比、成熟個体の推移

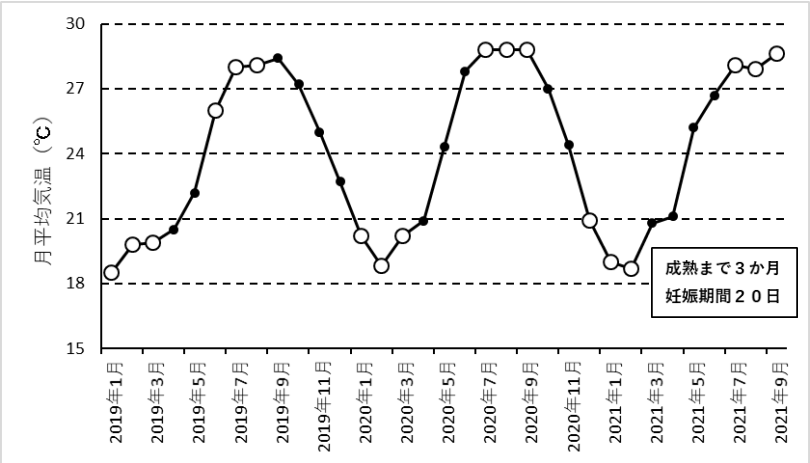


図　父島の月別平均気温の推移
〇は未成熟個体が産まれた推定月を示す。

②母島

母島ではクマネズミとドブネズミの２種が捕獲された。クマネズミの捕獲数は初回の 2019 年 3 月を除き、夏季に多く、冬季に少ないという父島と同様の季節変動を示した（図 3)。クマネズミの性比はおおよそ 1:1 であり、未成熟個体の出現様式から父島と同様に周年繁殖し、夏季に繁殖盛期となることが推察された。ドブネズミについては捕獲数が少なく、性比や捕獲数にバラツキが大きく、明確な季節変動はみられなかった。ネズミ類 2 種の出現割合には地域間で大きな差は無く、集落全体でクマネズミが優占していることが示唆された（図 4)。しかし、餌を用いた捕獲方法であるため、種間の食性の違いが出現割合に影響している可能性も考えられる。

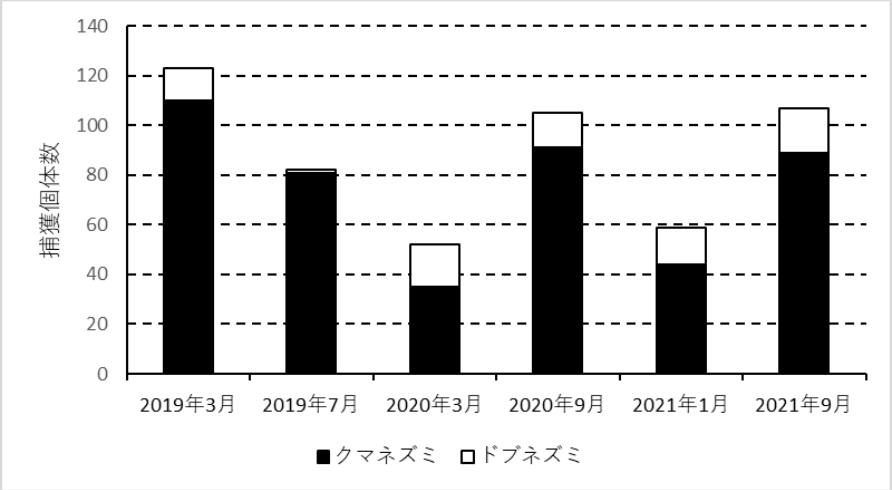


図　母島におけるネズミ類２種の捕獲数の推移

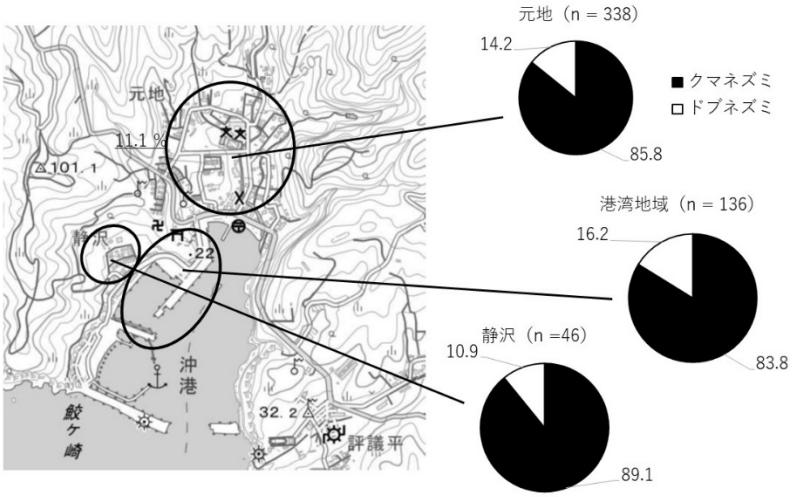


図　2019－2021 年の母島におけるネズミ類２種の地域別出現割合
数値は２種の出現割合を示す。

参考文献　森彰．1957．*Rattus* 属の性成熟．家畜繁殖誌．2(3)；94-97

参考２．ネズミに関する情報収集（奥村地区モニタリング）

①目的

集落地におけるネズミ類の傾向を把握するため、継続的なモニタリングを実施し、集落一斉防除の実施時期等の検討に用いるネズミ防除の基礎データを蓄積する。

②実施方法

奥村地区（グラウンドと保育園裏）で四季ごと４回／年、カゴ罠によるモニタリングを実施（55 基で概ね 4 日間稼働／回）。

③結果概要

■捕獲率の季節変動

奥村地区における捕獲率は 6 月と 9 月に高く、12 月と 3 月に低い傾向が示され、集落地域一斉防除で得られた結果と対応していた。

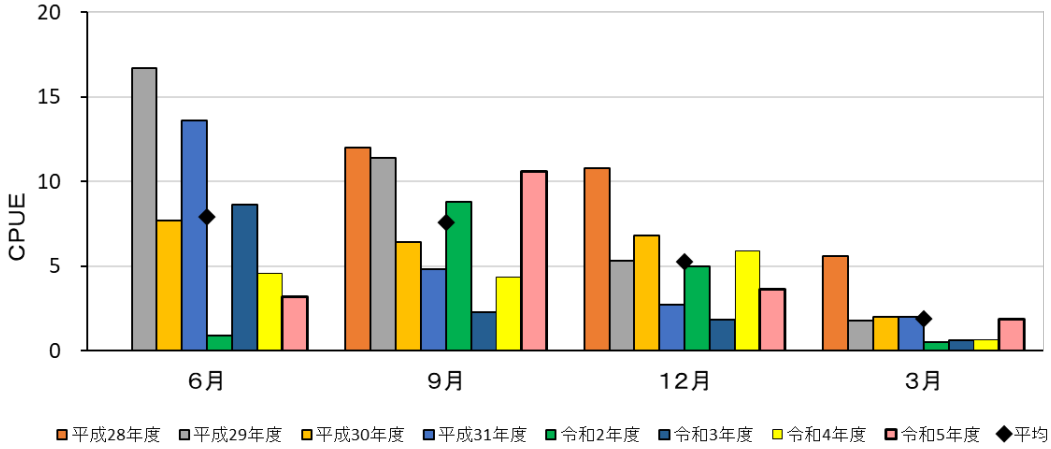


図　奥村地区における捕獲率の季節変動

■捕獲率の年変動

奥村地区における捕獲数と捕獲率は令和３年度までは減少傾向を示しており、それ以降は微増傾向であるが、詳細な原因は不明である。

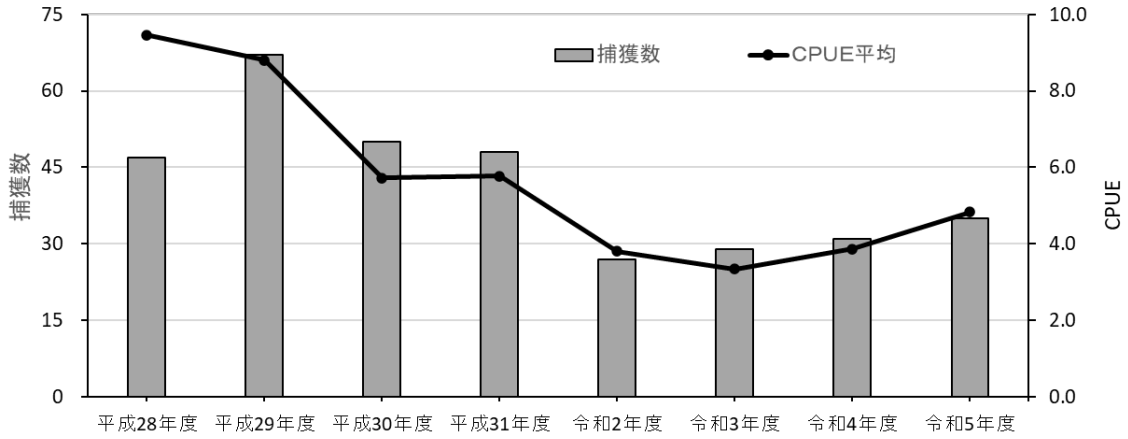


図　奥村地区における捕獲数と捕獲率の年変動

参考３．ネズミ捕獲器、ベイトステーションの貸与事業

①事業内容

平成 28 年度からカゴ罠の無料貸出を実施している。令和３年度に要綱を改正し、貸与期間を１ヶ月から１年まで延長することを可能とした。ベイトステーションは、農業者を主とした無料貸与を令和３年度から開始した。

②事業状況

■ネズミ捕獲器

貸出件数及びカゴ罠数は令和３年度までは増加傾向であり、事業に対する認知度が向上していると考えられる。ただし、令和４年度は貸与期間を１年に延長した影響か減少している。

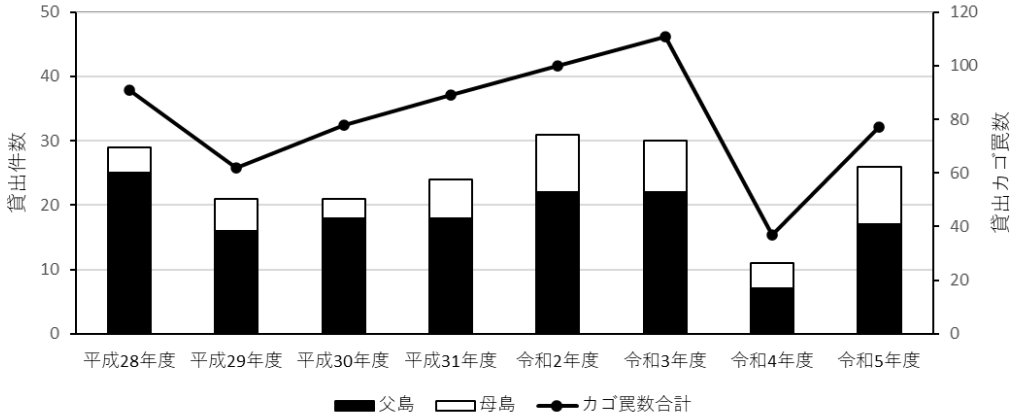


図　ネズミ捕獲器の貸出件数とカゴ罠数

■ベイトステーション

父島で 24 件（104 基）、母島で 11 件（67 基）、累計 171 基のＢＳを貸し出している（令和６年 12 月時点）。

なお、令和６年８～９月に平島ネズミ対策の余剰殺鼠剤（粒剤）の活用とオガサワラカワラヒワへの配慮としてＢＳ使用の促進を図り、母島農業者向けに殺鼠剤の無料配布を行った。

母島農業者の皆様へ

殺鼠剤の無料配布について

村では、オガサワラカワラヒワ（オガヒワ）を保全するため、平島でのネズミ駆除対策などを実施しています。

今回、平島でのネズミ駆除対策で使用している殺鼠剤のうち使用期限がわずかとなった殺鼠剤を次のとおり無料で配布します。無料配布は今回限りとなります。

【殺鼠剤の無料配布】
配布する殺鼠剤：ヤソジオン（粒剤）、使用期限は令和6年10月までです。
配布対象者：母島の農業者
配布条件：必ずベイトステーションを使用してください。
集落内では使用せず、農地でのみ使用してください。
配布数量：一世帯あたり10kgまで
配布期限：令和6年8月31日まで
配布方法：まずは母島支所に連絡し、その後、農協での受け取りとなります。
※ベイトステーションの無料貸し出し　一世帯あたり10基まで、最長一年（更新可）貸与可能。
母島支所または環境課に申請し、農協で受け取り。

<ベイトステーションの効用>
・殺鼠剤を使ったネズミ駆除を行う場合、穀物が主成分の殺鼠剤をオガヒワが誤って食べてしまう恐れがあります。そのため、殺鼠剤をベイトステーションに入れて使用することで、オガヒワにとっても安全な方法でネズミ対策が可能です。
・風雨による殺鼠剤の劣化を抑えられます。
・子供やペットによる殺鼠剤の誤食、野生動物による摂食を防止できます。
<ベイトステーションの使用方法>
・ベイトステーションを20m程度の間隔で設置する。
・2～3週間程度ごとに点検し、殺鼠剤(粉剤)を補充する。開始後1週間程度は消費が多い。
・殺鼠剤の充填量は1基あたり200gからはじめ、消費量が多くなったら400gに増量する。
ベイトステーション内は2つの部屋に分かれており、殺鼠剤を1部屋にすり切りで充填すると約200g。

村では、カゴ罠・ベイトステーションの無料貸し出しや農業者の方を対象とした殺鼠剤・ベイトステーションの購入費補助を実施しています。追加の殺鼠剤やベイトステーションを購入する場合は、村の補助制度をご利用ください。

皆様には、引き続き、各個人の財産を守るための自主防衛をお願いするとともに、村や関係機関が実施する自然環境保全の取組みへのご理解ご協力をいただきますようお願いいたします。

【担当課】
ベイトステーション、カゴ罠の無料貸し出し　環境課　2－2270
殺鼠剤、ベイトステーション購入費補助制度　産業観光課　2－3114
まずは、母島支所(3－2111)までお問合せください。

裏面　オガヒワとは？

オガヒワとは？

オガヒワことオガサワラカワラヒワは小笠原の固有種です。日本の固有の鳥は１０種しかおらず、小笠原だけでなく日本の鳥を代表する種といえます。

オガヒワは樹上に巣をつくるため、木登りが得意なクマネズミやノネコ等の食害を受け、母島では繁殖しなくなってしまいました。ドブネズミのみいる母島列島の無人島で繁殖はしていますが、生息数は減っており、絶滅の危機に瀕しています。

【オガヒワの特徴】
・メグロと同じくらいの大きさ
・メグロに比べ、ずんぐりむっくりとした体形
・大きなくちばし
・大人のくちばしはピンクで、若鳥のくちばしは黒
・鳴き声は「 キリリリ　ピィ～ン 」などと聞こえる

雄鳥　雌鳥　若鳥

そこで関係機関・団体が連携し、無人島のネズミ対策を進めており、オガヒワの目撃数が少しずつ増えています。近年ほとんど見ることがなくなっていた母島でも、最近は農地などの開けた草地に、植物の種などの餌を求めて春から秋にかけて飛来しています。

オガヒワの生息状況をより詳しく把握するため、目撃情報を集めています。農地などで見かけた際には環境省母島事務室（３－２５７７）までご一報ください。

図　母島農業者向け
殺鼠剤配布チラシ